

女の子のおもちや

kawana-hidehisa

## 女の子のおもちゃ

---

「お父さん、ご飯ができましたよ」

「いただきます」

僕は公園の木の葉をむしゃむしゃと食べる真似をした。

「おいしいですか？」

「うん、おいしいよ」

遠くから大きな笑い声が聞こえた。同じクラスの木下たちだ。

「おい、ままごとやってるぜ」

「男のくせに変なの」

山崎も一緒にからかうが、僕は何も言い返さない。ままごとが楽しいから。

「ちょっと、楽しく遊んでるんだから邪魔しないでよ」

「変なの！ 変なの！」

木下たちはそう言いながら、その場から去って行った。

「もう、どうして男の子ってあんなのかしら」

慶子ちゃんは呆れたように言うと、

「松下君、気にしたら駄目よ」

僕をなだめてくれた。

「うん、ありがとう」

「松下君は心が優しい男の子なのよね」

僕と慶子ちゃんは、毎日のようにままごと遊びをしている。

僕はままごとが大好きだ。

テレビ、冷蔵庫、洗濯機、掃除機など家電製品のおもちゃを見ていると楽しい。

だけど、それらは女の子のおもちゃになってしまう。

男の子のおもちゃは、車、ロボット、銃とかだ。

男の子が家電に興味を持っていけないなんて決まりは無いはずなのに、変だよ。

「さあ、続きを始めましょ」

「うん」

僕は慶子ちゃんが冷蔵庫から取り出したお酒を飲む真似をした。

夕ご飯はお母さんと二人で食べた。

「お父さん、今日も帰りが遅いの」

「そうねえ、しばらく残業が多くなるって」

「そう」

お父さんは、いつも仕事が忙しい。

働いている現場を見た事はないけど、お父さんが誇らしかった。一生懸命に働いて人の役に立っているんだ。

でも、もっと、お父さんと一緒に遊びたいなあ。

今日も学校が終わると、公園で慶子ちゃんとままごとを始めた。

「お風呂とお食事どっちにしますか？」

「今日はお風呂がいいな」

「はいはい。洗濯物はここに置いて下さいね

」

慶子ちゃんは洗濯機のおもちゃがある方を指差した。

僕は服を脱ぐ振りをして、お風呂に浸かっている真似をした。

「ああー、気持ちいいなあー」

「お湯加減はどうですか」

「ああ、いいよー」

遠くから大きな笑い声が聞こえた。やはり木下たちだ。

「またやってるぜ」

「恥ずかしくないのかよ」

慶子ちゃんが小声で言った。

「無視しましょ」

「うん」

その時だった。

「お前の父ちゃんも変なんだろ！」

木下の言葉に僕は立ち上がり、木下を睨みつけた。

「な、なんだよ」

「お父さんを馬鹿にするな！」

僕は木下の胸ぐらをつかんで、投げ倒した。

木下は地面に倒れると、泣き出した。

慶子ちゃんが僕に言った。

「どうしたの？ 松下君らしくないよ」

「だって、お父さんを馬鹿にしたから」

「でも、乱暴は良くないよ」

「僕のお父さんは、テレビや冷蔵庫を作る会社で働いてるんだ」

慶子ちゃんは納得した様子で言った。

「だからままごとが好きなんだ」

慶子ちゃんは泣いている木下に話しかけた。

「松下君を怖がらないで。お父さん思いのとってもやさしい子なんだよ」

木下は頷きながら、涙を拭いていた。

その様子を見て、僕は言った。

「一緒に遊ぼうよ。家族は多いほど楽しいよ」

僕がお父さん役、慶子ちゃんがお母さん役、木下と山崎が子供役になった。

その日から皆でままごとをやるようになった。たまにキャッチボールやサッカーもするけどね。

【終わり】